



第3図 洪水回数の永年変化

れ、これは気候の変動を表すものと解釈できよう。そこで、これを確かめるため、もとのグラフを平滑化し、それからの偏差をとって自己相関係数を求めてみたところ、ほぼ70年前後の遅期性があることがはっきりとした。そこでさらにこの偏差値について、調和分析を行い、いろいろの遅期の振幅を求めてみたところ第5表のようになった。これを見るとあきらかに80年遅期と60年遅期が認められる。

第5表 洪水回数の調和分析

遅期	20	30	40	50	60	70	80	90	100	誤差
振幅	0.08	0.43	0.35	0.93	1.54	0.29	1.67	0.59	0.25	0.47

日本の気候に80年遅期があることは凶作の例について故藤原博士により示されたことがあり、太陽黒点の長期変化とむすびつけている。なお、降水量と太陽黒点の長期遅期変動と平行する⁽²⁾ことは山本武夫氏により示されたこと⁽³⁾であり、最近 Shove は1550年までさかのぼり、78年遅期があることを示している。この点からみると80年週

冷奴とすき焼 関口 武

とうふ屋の繁昌するのは夏と冬だということである。冷奴とすき焼だろうか。

「暑い所に住む人は淡泊な料理を好み、寒い所にすむ人は濃厚な味の料理を好む」。とはよくいわれる。われわれの嗜好も、そういわれてみると夏は口当りがよくてあっさりしたものを、冬には暖かくて腹もちのよいものを好む傾向があるような気もする。例えば、よほど物好きな人ででもない限り、真夏にすき焼を食べようという人はまずあるまい。だからといって、脂肪・蛋白質の摂取量に関する定量的な統計なしに、こういう説を主張することは科学的であるとはいえない。しかし相憎こういうことに関する正確な資料はできていないらしいので、ここでは余り科学的でない憶測を2、3述べることを許されたい。

「寒い所の味噌は塩気が強く、暖い所の味噌は味が甘い」。という。真偽の程はどうだろうか。誰か日本各地の味噌を集め、その中の塩分の量など測定してみようというきとくなく人はいないだろうか。それと各家での毎日の平均摂取量を調べ、それと各地の気候と比較したら、案

期は太陽活動に原因が求められそうであるが、最近筆者が調べた結果では60年遅期、7年遅期、8年遅期なども太陽活動の変化に原因を求めることが可能のようである。8年遅期についてはすでに北沢氏が論じてある。これらについてはいずれ別の機会に述べたい。

このような分析結果からみると数10年遅期の長い遅期の変動があり、また数年程度の遅期が混っていることはほぼ確かのようにである。しからば、このような遅期的の変化は何に基づくのであろうか。これは簡単には結論できないが、遅期が非常に安定している点からみて、天文学的原因、すなわち太陽活動の変動に原因をもとめるのが自然ではなからうか。

文 献

(1) 鎌田恒夫, 1944: 中部九州の雨が週期に就いて, 気象集誌, 22, 199~203.

小沢正, 藤田敏夫, 1952: 東北地方の気象変動, 気象集誌, 30, 132~162, 190~202.

(2) T. Yamamoto, 1950: On the secular change of the climate in Japan, Geophys. Mag. 21, 249~268.

(3) D. T. Shove, 1954: The Sunspot cycle, 649D. C. to A. D. 2000, Jour. Geophys. Res. 59.

外面白い結果が出るのではあるまいか。ことに「西日本では豆味噌の代りに、麦味噌、米味噌が使われる場合もあるとか、味噌汁よりすまし汁の方が好まれる」。などということも聞くので、こうした点にも注意をはらう必要があるらう。

「信州人はお茶をよく飲む」。という。本当だろうか。理くつとしては「信州は山国で、内陸にあり、乾燥している。従って皮膚から、あるいは呼吸によって大気中に放散される水分の量が湿潤な土地にいる場合より多くなり、それを補給するために、水分を摂取する」といえそうであるが、もし本当に信州人が他の人達より多量にお茶をのんだにしても、事情はなかなか複雑であろう。しかし「外気がこの程度乾燥して来る場合にはこの程度水分摂取量が増加する」。といった知識は得ておきたい気がする。

「東京ではそば屋、大阪ではうどん屋」。これは何に原因するものだろうか。単なる食物の歴史に由来するのか、その歴史によって培われた人々の嗜好の告に原因するのか、あるいはまた東日本と西日本の気候のちがいのことにも何等かの関係があるのだろうか。そばの産地は、そば屋の多い東日本に集中しているだろうか。